

【中編② CFNM&嫉妬勃起NTR(月読の村編)】水泳部エロマネ彼女 ～男性は下半身裸が義務の村

第21章 呼ばれた日

それから、数日が過ぎた。

四日目の午後、沙織から連絡が入った。

有紀は電話を耳に当てたまま、何度か小さく頷いて、切った。

壮太の方を見て、少しだけ息を整えてから言った。

「追加の測定だって。

女手が足りないの。

沙織さんと里香さんと、私。

本測定じゃないよ。村の人の体調を見る分。

.....行かなきゃいけない。

壮太は、見てて。

あの夜、そう言ったでしょ。

見てくれないと、私、自分がどこまでやってるのか、わからなくなるから」
集会所には、村の男たちがすでに列を作っていた。

下半身は晒されたまま。

熱を帯びたもの、まだ柔らかいもの、先だけ赤くなっているもの。

沙織が記録用紙を持ち、里香がローションを準備している。

美咲が有紀の肩に手を置いて、低く、しかし熱を含んだ声で言った。

「急で悪いわね。でも、手は抜かないで。

本測定は儀式のための記録。今日のは、身体を守るための確認。

触るときは、数字より先に熱を見て。

声は落とさないで。

彼に聞かせるために、言いなさい。

女の声できちんと勃起する身体は、健全なのよ」

最初の男が台に立つ。

有紀はローションを掌で温めてから、根元を包んだ。

指の腹に、他人の脈が直接くる。

「今日は、自分でどこまで硬くできますか。

途中まででいいから、やってみて。

無理なら、私が介助するから」

男が自分の手を動かし、途中までしかいかない。

有紀は少し顔を近づけ、聞こえる声で言った。

「じゃあ、介助するね。

根元、太い。血管がすぐ浮いてくる。

力、抜きな。痛くないから」

有紀の指が皮膚を奥へ送り、先端を露出させる。

透明な液が、すぐに糸を引いた。

「出てる。熱い。

このまま測るね。動かなくていいよ」

沙織が横で、健に聞こえる声で言った。

「今の、聞こえてる？

有紀ちゃんの声、全部」

健は答えず、下だけを熱くしていた。

壮太も同じだった。

有紀の掌が他の男のものを包むたび、胸が締めつけられる。

止めたい。近寄りたい。名前を呼びたい。

どれもできず、自分のものが布の中で持ち上がっていく。

二次会の夜と同じ場所に、また自分が立っている気がした。

あのときも、有紀の唇が動くのを見て、何も言えなかった。

今も言えない。言えないまま、先だけが湿っていく。

美咲が男の腰に手を添えた。

声は優しく、中身は逃がさない。

「女の声で熱くなるのは、恥ずかしいことじゃないわ。

隠さなくていい。

がまん汁も、出したまま見せなさい。

その反応があるから、今日測る意味があるの」

有紀が長さを読み上げる。

男の先が、メジャーの縁に当たってひくつく。

壮太はその小さな動きまで見てしまい、自分の喉が鳴るのを止められなかった。

三人目は年下で、皮が先を覆っていた。

有紀は両手で持ち、少し困ったように、しかし明確に言った。

「皮、まだ被ってる。

自分でむけますか。

むけないなら、介助するよ」

「……むききれないです」

「わかった。じゃあ、私がやるね。

細長くて、先が隠れやすいタイプ。

むくと色が変わるから、ゆっくりいく。

痛かったら、すぐ言って」

有紀は皮を送り、赤い先を出した。

里香が「その子、敏感。強くしないで」と入れ、有紀は力を弱めた。

内側をローションで滑らせると、男の腰が跳ね、液が指に絡む。

「痛くない？ 液、多いね。

開いたまま測るよ。このほうが正確だから」

美咲が男の肩を押さえ、先を指で軽く見た。

「隠したまま測っても、意味がないの。

女が開いて、液の量まで口に出す。それが記録。

恥ずかしいなら、恥ずかしがったままでいい。

そのままで、硬くしなさい。

感度が高いのは、欠点じゃないわ」

壮太の喉が、また鳴った。

有紀の指が、他人の皮を丁寧にもんでいる。

その丁寧さが、嫉妬を深くする。

『自分のときより、丁寧なんじゃないか』

そう思うのが怖くて、でもその怖さごと、下半身は熱を増した。

布の内側が湿り、先が生地に貼りついた。

有紀が測り終え、ちらりとこちらを見る。

『見てる？』

壮太は逸らさなかった。硬さも、隠さなかった。

逸らしたら、有紀がどこまでやるのか、自分で確認できなくなる気がした。

美咲が壮太の横を通り、視線だけを股間に落とした。

声は、ほとんど囁きだった。

「その硬さ、彼女に見せなさい。

見られている女は、手が丁寧になる。

丁寧な手は、男を早く開かせる。

あなたが隠すと、彼女の手は雑になる。

雑にされた男は、次に立たなくなる。

見なさい。それが、この場での務めよ」

休憩に入っても、列の男たちのものは収まっていなかった。

沙織が水を飲みながら、有紀に言った。

「健も、全部聞いている。

『介助するね』も、『液、多いね』も。

顔は平たいけど、下は隠せてない」

健は腕を組んだまま、沙織の指先を見ていた。

平たい顔の下で、自身が脈を打っている。

有紀は壮太のそばへ戻り、ローションの匂いのする指で彼の手首を触った。

「同じだよ。

見てる。言わない。なのに、硬くなってる。

健さんも、壮太も。

私、その顔を見ると、手が丁寧になっちゃう。

だめなのにね」

壮太の声は低かった。掠れていた。

「有紀の手が、俺のじゃないチンポを勃起させるのを見て、立ってしまう。

形を声に出されるのも聞こえる。

だめなのに、収まらない。

収めたくても、収まらない」

有紀は手首から、布の上の膨らみへ指を滑らせ、一度だけ形を確かめた。

熱い。脈がある。

「だめでも、見てて。

見ててくれないと、私、仕事の顔のまま戻れなくなりそう。

壮太がこうなってるのを見ると、手が丁寧になる。

その丁寧さで、また次の人を開いてる。

矛盾してるのは、お互いさまだよ」

美咲が後ろから、短い声を足した。

「その循環は壊さないで。

隠した男は、熱も痛みも言わなくなる。

嫉妬で立つなら、立ったまま見なさい。

それが、一番正直よ」

後半、立たない男が来た。

沙織が根元を長く握り、有紀が先を開いた。

「力、抜いて。先が冷たい。

温めてから測るから。怖がらなくていい」

男が「お願いします」と漏らす。

二人の手が、根元と先で別々に動く。

ぬるぬるとした音が、近くまで届く。

美咲は男の耳元で、指先だけをがまん汁に浸した。

「出してはいけないわ。今日は測る日。

立たない日があるほど、女の手が要る。

頼みなさい。頼める男のほうが、壊れにくいのよ」

男のものが、二人の掌の中で急に熱を持ち、限界まで起き上がった。

先が光り、有紀の指に脈が伝わる。

有紀は少し息を止めてから、数字を読んだ。

沙織が記録する。

健の視線が、その結合した手元から離れなかった。

終わり際、美咲は記録を閉じながら、場に残る熱を見て言った。

「今日はここまで。

本測定は儀式の記録。今日のは身体の確認。

女が触り、声に出し、硬さを残す。

数字だけじゃ、身体は開かない。

見ていた人たちも、自分の硬さを否定しないこと。

彼女の手が他の男に触れているあいだに立ったなら、それは嘘ではないわ」

有紀は手を洗い、洗い切れなかったローションの光を残したまま、壮太の前に立った。

声が、いつもより少しだけ優しい。

「今日は口も、挿入もしてない。

触って、硬くして、測っただけ。

それでも壮太は、ずっとその顔をしてた。

布の上からでも、わかる。

見ててくれて、よかった。

義務だから出た。村の健康管理の当番だから出た。

でも、見てる壮太がいるから、私は途中で自分を見失わなかった。

次に呼ばれたら、また出なきゃいけない。

そのときも、逸らさないで。

目を逸らされたら、私、どこまでやってるのか、自分で確認できないから」
壮太は自分の前を押さえ、押さえきれずに言った。

「皮をむくところも、液を確認するところも、全部見てた。

見てるあいだ、一度も収まらなかった。

収まらなかった自分が、一番だめだ」

有紀はその押さえている手の上に、自分の手を重ねた。

「だめな顔のまま、見てて。

それが、今の私たちだよ」

美咲が横を過ぎるとき、有紀にだけ聞こえる声で言った。

「次は、今日より声を出しなさい。

彼は数字より、あなたの言葉で立っている。

手は治療。声は鍵。視線は、止めないこと」

帰り道、有紀は壮太の手を握った。

もう一方の手で、壮太はまだ自分の前を押さえていた。

押さえているのに、形は隠れていなかった。

有紀はその形から目を離さず、握っている手だけを、強くした。

~ つづく ~